

IATSS三十周年によせて

学際的研究の体験に感謝

新谷洋二 (財)日本開発構想研究所理事長・東京大学名誉教授



(財)日本開発構想研究所理事長・東京大学名誉教授。1930年東京生まれ。53年東京大学工学部卒、55年同大学院修士修了。建設省都市局を経て、65年東京大学工学部助教授、78年教授、91年停年退官し、日本大学理工学部教授となり、2000年定年退職して、現職。

国際交通安全学会が設立三十周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。思えばその設立時の昭和49年に会員に加えられた時、まだ44歳だったが、このことが将来私の研究内容に重大な影響を齎すとはまったく考えてもいなかった。

記憶に残る最初の研究テーマが「数寄屋橋交差点の研究」だった。これはわが国ではじめてスクランブル方式を適用した大型交差点について、会員が2チームに分かれて学際的研究のトレーニングを試みるものだった。私はかつて昭和30年代にアメリカで実施されたスクランブル交差点について勉強したことがあって、適用原則から外れた数寄屋橋交差点で研究することに当初はあまり気乗りしなかった。しかし、ビル屋上から連続撮影された交通現象の映像を観察しているうちに、引き込まれ、興味を抱き、積極的に参加するようになった。しかし、学際的研究の場に立つと、工学部の人だけでもなかなかお互いの専門知識が理解できないのに、文学部・経済学部・法学部・教育学部・医学部などの人たちと話してみると、同じ言葉でも意味が違う、概念が違う、考え方が違うといったことに気づいた。従来工学部では、研究テーマを説明すると「それはなんの役に立つのか」を必ず聞かれることを話したところ、文学部の人から「どうして学問は役に立たなければいけないのか。大体文学部での研究は役に立たないものですよ」と言われ、私はキョトンとした。これは私の研究の常識を打ち破るカルチャーショック的な最初の言葉だった。また『モビリティ』について議論している時に、哲学の方から『インモビリティ』についても議論すべきだと言われて、一瞬皆面食らってしまった。我々工学部の人にとって『交通』のことを考えている時に、『不動』すなわち『動かない』ことは、まさに考えの虚の部分になってしまい、まったく考えてもいなかった。こういった刺激的な議論が契機になって、当時丁度私自身の中で思い悩んでいた境界領域の研究の解決のためにきわめてありがたい教育をそれ以来十数年にわたって経験させていただいた。

私は大学生の頃から城が好きであったため、表芸は未来の都市計画・交通計画を研究していたが、裏芸はあくまで趣味として、私的に城のことを調べていた。しかし、大学紛争後の教育改革の一環としてできた全学ゼミナールで、同僚の教授に勧められ、昭和48年はじめて城研究の一部を開講した。さらに、土木学会に創設された日本土木史研究委員会で昭和55年に第2代幹事長に指名され、次第に歴史的研究も表芸の一部として顔を出すに至った。さらに昭和60年、萩城の堀内地区で生じた文化財の保存と都市計画道路の整備計画をめぐるトラブルを調整するため設置された文化庁と建設省の懇談会座長を務めたことから、以来、萩、杵築、松本、川越、益田、姫路、掛川など各市の文化財と都市計画道路の競合問題の調整を行った。また金沢城や仙台城などの復元・修復委員会委員長として、伝統技術による復元を基本としつつ、安全性を考慮した現代工学による補強方法との調和を図るべく論議して調整に努めた。私自身で表芸と裏芸の境界をつなぎ、こういった学際的研究に積極的に挑戦するようになったのも、IATSSで学際的研究に対する研究姿勢や考え方を各分野の方々から学び、体得させていただいたおかげと感謝している。